

「和珥氏」は奈良盆地北東部を本拠地とし、5世紀から6世紀後半にかけて活躍した大豪族であった。応神、反正、雄略、仁賢、継体、欽明、敏達の7人の天皇に対し9人の后妃を入れた古代の外戚氏族として知られ、同じように古代の外戚氏族として権勢を誇った葛城氏や蘇我氏に勝るとも劣らない。和珥氏は後の藤原氏に繋がる閨閥氏族のルーツと言えるのである。

ただ不思議なことに和珥氏から大臣は出ていない。有名なのは一夜で妊娠したので天皇に疑われたというエピソードがある和珥臣深目の娘、童女君(おみなぎみ)、その子で仁賢の皇后となって武烈天皇を産む春日大娘(かすがのおいらつめ)、その子で継体の皇后となって欽明を産む手白香皇女(たしらかのひめみこ)など、専ら女系である。

「ワニ」という氏族名は、地名の「和爾」(現在の天理市和爾町)に由来するといわれる。和珥氏が記紀に登場するのは応神朝から継体朝ぐらまでで、その後本拠を春日の地に移して、敏達朝頃に春日、大宅、粟田、小野、柿本などの同属氏族に分化したと見られ、一族から遣隋使の小野妹子や万葉歌人の柿本人麻呂などの著名人が出た。

和珥氏は謎の古代豪族である。古事記の歌謡や説話を引用してその姿を考えてみた。

1、崇神天皇の頃、四道将軍の大彦命が和爾坂で不思議な少女の歌を聞くこと

27日、大彦命、和珥の坂に至る。ときに少女がいて歌っていた。

「ミマキイリビコ、己が命が狙われているのも知らずに、娘と遊んでいることよ」

大彦が怪しんで、何のことかと少女に尋ねた。すると少女は

「いいえ、私はただ歌っているだけなのです」と言って、姿を消した。

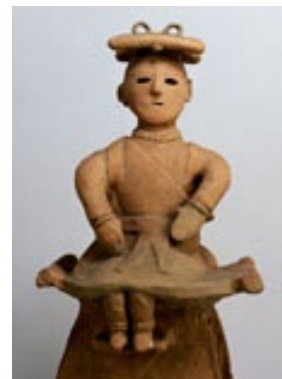
そこで大彦は都に戻り大王に尋ねると、ミマキイリビコ大王が言った。

「これは山背の武埴安彦(たけはにやす)の謀反のしるしであるに違いない」

大王は直ちに、大彦に和珥臣の祖の彦国葺(ひこくにぶく)を副え、討伐を命じた。討伐軍は、和珥坂の上に忌襲(いわひべ)を据えて神祀りをし、山背に向かった。

大彦が山背の輪韓川(わからがわ)に至ると、武埴安彦が待ち構えていた。そこで川を挟んで向かい合って挑みあった。そこからその川はいどみ川、泉川と呼ばれた。

彦国葺が川向うの武埴安彦に「まず汝が忌矢(いわいや)を射て」と言うと、その声に応え武埴安彦が矢を射たが、それは大きく外れた。次に彦国葺が矢を射るとその矢は武埴安彦の胸を貫いた。それを見た賊軍は怯えて逃げた。彦国葺は逃げる賊軍を追ってクスバの渡りに至った時、賊軍は逃げ場を失い恐ろしさのあまり禪を汚した。それでその所は今、樟葉と呼ばれるようになった。



四道将軍の大彦命が会った少女は、古事記に「腰裳を着けていた」とあるから、神女、おそらく古代の巫女のことでしょう。彼女が歌っていたのは「神の言葉」で、神が武埴安彦の謀反を大彦に告げたのです。まだ文字が無かった時代、人々は神の言葉を、巫女の舞いや歌で記憶したのです。

その後、大彦と和珥氏の祖の彦国葺は武埴安彦の討伐に向かうわけだが、その時和爾坂の上で神祀りをして出陣している。和爾坂はおそらくこの地を本拠地としていた和珥氏の神祀りの場所で、そこでは古代の倭の軍人(いくさびと)たちが戦いに行く時、戦勝の祈祷儀礼が行なわれたのでしょう。「和爾坂下伝承地」のある和爾の集落は遠い時代、そのような場所だったのです。

奈良盆地の東北の野辺、布留や春日の深い杜を後ろに控えたこの小高い丘は、黎明の中にも野辺を埋めた人々にはくっきりと見えたでしょう。その丘の上の神祀りの場所では、古代の巫女が神の姿で舞いながら、神の歌を高らかに歌うのです。

『撃ちてし止まむ！（やっつけてしまえ）』と。

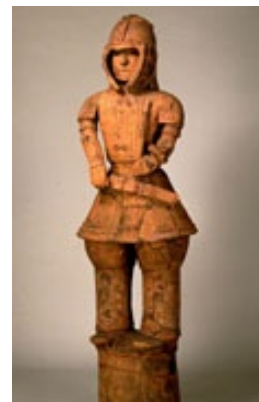
ところでこの「和爾坂」で、どうして倭の兵士たちの出陣儀礼が行なわれたかということだが、この場所は古代の交通の要衝だったからでしょう。大王の都から奈良の東辺を北へ向かう古代の幹線道路、山の辺の道はここから東の大和高原の都祁から伊賀に抜ける道と、西の生駒から難波に抜ける道と交差している。四道将軍もヤマトタケルもこの「和爾坂」で神の言葉を聞いて、西に東に旅立って行ったのです。

もう一つ少女の歌から考えられるのは、ここが「古代の歌垣」の場所だったということ。歌垣の場所は古代の道が出逢うところで、人々はそのような場所には神が居ると考えていた筈です。歌垣で出逢う男女はどちらも「神」、男女は神の歌を歌って相手を求めたのです。神の仕事は豊穡をもたらす事、子孫を残すことはそれは神の御技に他ならない、和爾坂周辺の岡々は、和爾の人々にとってそんな場所だった筈です。

その後、泉川（木津川）や樟葉の地名起源説話が出てくるが、これは和珥氏の勢力が木津川から淀川、さらには琵琶湖へと進出していったことを物語っているといわれています。すなわちこの説話は和珥氏のもので、武埴安彦を射殺する「副将の彦国葺」、彼こそがこの説話の主人公だったのです。

2. 神宮皇后が日嗣の皇子(応神天皇)共に大和へ帰るとき、香坂王と謀って待ち構えていた仲哀天皇の御子の忍熊王を、和爾臣の祖の武振熊が討つこと

この時、忍熊の王は伊佐比宿禰(いさひのすくね)を将軍とし、皇后方は和邇の臣の祖、武振熊を将軍とした。はじめは武振熊が伊佐比を山背まで追い退けたが、押し返されてどちらも引かなかった。そこで武振熊は偽って「皇后はすでにお亡くなりになられた。もう戦う必要はないだろう」と言って、弓弦(ゆみづる)を切って降伏した。それを見た伊佐比は自らも弓



の弦を外し武器をしまった。すると武振熊方の軍人(いくさびと)たちは髪の毛の房の中から、隠しておいたもう一つの弓弦を取り出し、弓に張り直して敵を撃った。

忍熊王方は琵琶湖の沙々那美(ささなみ)に追い詰められて破れ、軍人たちは切り殺されてしまった。忍熊王と伊佐比の二人は追い詰められて船に乗り、琵琶湖に漕ぎ出すと、忍熊王が歌を歌った。

いざあぎ 振熊が 痛手おはずは には鳥の 淡海の海に 潜(かす)きせなわ
(さあ宿禰よ、振熊に痛手を負わされる前に、かいつぶりのように潜ってしまおう)
こうして忍熊王は將軍の伊佐比と共に湖に沈んだ。

この歌謡は、勝利者の伝承として和珥氏に伝えられたもので、神功皇后の將軍としての事跡を物語っていることからみて、和珥氏が応神王朝の成立に活躍したと言っているのでしょう。ここに登場する武振熊という人物のころは、和珥氏は葛城氏と並ぶ大豪族で、倭王権を支える武人豪族だったと考えられるのです。

3世紀に三輪山の麓に誕生したヤマト王権は、多分に畿内の豪族との連合政権で、和珥氏はその有力な一員だったのでしょう。3世紀半ばから4世紀にかけて、大王家と連合政権の首長たちは、盆地東辺のオオヤマト古墳群に集中的に墓地を築きますが、大王家の陵墓はその巨大化に伴い、佐紀から河内へと移っていくことになります。

大王家の陵墓地が佐紀に移動するころ、各豪族の首長墓も彼らの本願地に築かれていったと考えられます。東大寺山古墳群は和珥氏の奥津城と考えて間違いのないし、和珥の首長たちはここに自分たちの陵墓を築いたのでしょう。

その中の最大の東大寺山古墳が築かれたのは4世紀半ば、そこには有名な卑弥呼が魏王から下賜されたと伝えられる「中平の太刀」を始め、多数の刀剣が出土した。河内王権の応仁天皇が登場するのは4世紀末、和珥氏に伝えられた伝承が語るように、武振熊という人物がその成立に大きな功績があったとしたら、彼こそが東大寺山古墳に眠る人物に相応しいのではないのでしょうか。



3 . 和珥の宮主矢河枝比売の元に、応神天皇が歌を歌って妻問いすること

ある時、大王が木幡の村で一人の乙女に出会い「汝は誰の子ぞ」と尋ね、乙女が、「和珥の日触使主(ヒフレノオホミ)の娘、宮主矢河枝比売(ミヤヌシヤガハエヒメ)でございます」と応えると、大王は「明日、そなたの家に立ち寄ることにしよう」と言って立ち去った。次の日、矢河枝比売が家を飾り整えて待つと、大王が訪れた。そこで比売は大王に供え物を出して奉り、大きな杯の酒を差し上げた。大王はその酒盃を受け取り、歌を歌った。それは俳優(わさびと)たちの歌で、婚礼を言祝ぐ歌であった。

この蟹や いずくの蟹 百(もも)伝ふ 敦賀の蟹 横去らひ 何処に至る
木幡の道に 出会った乙女 後ろ姿は 小さな楯 齒並びは 椎の実のよう

櫛井(いちひ)の 和珥坂の土を 上面は赤く 下面は黒く 三つ並ぶ栗の実の
その中ほどの土を 頭を焦がす火はさけ とろ火でとんとろりと
煎って作りし眉墨を かくもだらりと画き垂らし 出会った乙女 麗しく
私の思うとおりの乙女子よ 肌ふれ、心も張り裂けんばかりに向かい合っている
矢河枝比売が大王と結ばれ、生んだ御子が菟道稚郎子(ウジノワキイラツコ)である。

これは和珥氏に伝わる婚礼歌で、和珥氏の威勢を示す歌としておそらく代々の大王の宮で舞いとともに伎人たちによって披露されたのでしょう。敦賀は今の敦賀、木幡は宇治のあたりで、櫛井はもちろん天理の櫛本、和珥氏の勢力が宇治、琵琶湖と拡大し、敦賀まで至っていたと歌っているのです。

古事記の歌謡は演劇のセリフにあたるようなもので、(奈良図書館長、千田先生)雄略天皇の時代には大王の宮殿で演じられていたのでしょう。雄略朝の頃は古代の高度成長期、古事記の元になる「帝記」や「旧辞」が成立したのもこの時代のこと、この和珥氏の歌謡もこの頃に物語として纏められ、時間を越えて伝えられたのです。

4. 春日の乙女がワカタケル大王に出会い、岡のあたりに隠れてしまうこと

大王(ワカタケル)が、丸邇(わに)の佐都紀の臣(さつきのおみ)の娘、ヲド比売に求婚するために、春日を訪れたとき、その乙女に出逢った。すると乙女は大王の姿を見るなり、岡のあたりに逃げて隠れてしまった。それで大王は歌を作った。

乙女の隠れている岡よ くろがねの鋤を五百も欲しい
鋤き起こし探し出そう

それで、その岡を金鋤の岡と言った。

和珥氏が本拠を奈良の北方の春日の地に移すのは6世紀の欽明天皇のころで、これに伴って氏名を春日氏と改め、さらに敏達朝に入ると春日氏から大宅、櫛井(いちひい)、柿本などの氏族が分枝したといわれます。

この歌謡に歌われる求婚された乙女が逃げ隠れ、それを男が探し当てることは、古代の歌垣での習俗としてあったようで、「岡」は歌垣の場のことです。ここで詠われる歌謡はどれも和珥氏に関係した歌謡というより、当時の民間で詠われた歌のようです。

和珥氏は葛城や物部のように滅亡したのではないが、かつてのヤマト王権の軍事氏族は大王家に妃后を送るうちに、後の五摂家のように王権内部に取り込まれ、次第に豪族としての輝きを失っていったのではないのでしょうか。

古事記に見えるこの丸邇氏の娘の儂い物語は、そのような和珥氏の終焉を語っているように思うのですがどうでしょう。

